

# タイトル『まばゆい』

著者名／下田悠子

## 《あらすじ》

引きこもりの母と暮らす17歳の亜紀は、母の世話のためずっと学校に行っていない。生活が苦しくなりスーパーでバイトを始めるが、自分がいかに「普通じゃない」家で育ったかを思い知ることになる。世界と繋がろうともがく亜紀の姿に、母もまた小さな小さな一歩を踏み出す。

## 《特記事項》

この話で描いた母親は、側から見れば何も成長していないかもしれませんが。もしかししたら、明日には元に戻ってまた部屋に閉じこもるかもしれない。それでも、この母親が一歩、いや、半歩でも、自分の足で進んだその一瞬が、今どこかで進めずにもがいている人の、かすかな光になれば、という思いで書いた作品です。

《本編文字数》……………6333字

1	<p>スーパー・レジ(夕)</p> <p>よくある食品スーパー。 レジに並んでいるのは、矢野亜紀(やの あき 17)。 垢抜けない服装に、履き古したスニーカーという装い。 店員の葛西孝(かさい たかし 36)が、</p> <p>葛西「3678円です」</p> <p>亜紀「……(財布をのぞいて)……あの、すみません……あのコレと、コレ、あの、やめます」</p> <p>葛西「はい」</p> <p>亜紀「あの、これも」</p> <p>葛西「……はい」</p> <p>気まずそうな亜紀。</p> <p>× × ×</p> <p>サッカー台で袋詰めをする亜紀。 アルバイトの求人が貼ってあるのが目に入る。</p> <p>亜紀「……」</p>
2	<p>ATM・外(夕)</p> <p>通帳を開いて出てくる亜紀。</p> <p>亜紀「……」</p>
3	<p>矢野家(夜)</p> <p>狭い苦しいファミリー向けマンションの一室。 夕食を手際よく作っている亜紀。 こたつで、サプリメントの瓶を片手に電話をかけているのは母親の矢野るみ子(やの るみこ 39)。 電話の向こうの相手に文句を言っている。</p> <p>るみ子「あのね、ですから、ここに、書いてあるような効果がまったく！ ないんですよ。わかりますか？ お宅は、あんな、嘘つき広告出して、恥ずかしくないんですか？ ……いや</p>

だからね？　そういうことではなくて。誠意をね！？」  
夕食を並べる亜紀。

×　　　　　×　　　　　×

向かい合って食事をしている二人。

るみ子「亜紀のごはんが一番。こんな、健康食品とかそういうの、ダメね。やっぱり、食事からね、栄養、とらないと。あ、ねえ、（スマホを開いて）これ、どう思う？　快眠を促す、アロマ？　アンドリラックス……」

亜紀「ママあのね、あんまり買い物しないで」

るみ子「……なにそれ、ママが無駄遣いしてるみたいな」

亜紀「そうじゃないけど」

るみ子「……ママだって、健康にならないとって、いろいろ考えて」

亜紀「うん、わかるよ」

るみ子「……なに？　ママなんか死ねばいいの？　引きこもりで役に立たないママなんか、いらないんでしょ」

亜紀「ちがうよ」

るみ子「……何？　ママだって！　健康になろうと思っていろいろ」

亜紀「お父さん、最近、お金入れてくれてない」

るみ子「……え？」

亜紀「先月いくら使った？　引き落とし、アレかもだから……」

るみ子「……あ、っそう。……っそう」

亜紀「……ママ、パパとちゃんと離婚」

るみ子「離婚はしないよ？」

亜紀「……」

るみ子「そのうちね、ふらっと帰ってくんよ」

亜紀「……もう6年だよ」

るみ子「……ママだって！　健康になろうと思って……、なに？　やっぱりママが悪いの……？」

亜紀「……買い物しないでね」

るみ子「……亜紀も、そのうちママを捨てるよ」

亜紀「そんなことないよ。ね、あんま、買い物しないでね」

通帳片手に、電話をかける亜紀。  
亜紀「あ……もしもし、あの。お父さん。あの、……いや、ごめんなさいあの、今月の、そうです。振り込まれて、ない感じなんですけど……あ、はい、お願いします。え？ ああ……そうなんですか、ああそれは……おめでとうござい……ます。あの、忙しいと思うんですけど、早めに、はい。あの……ちなみに、弟？ ですか妹ですか」

5

スーパー・外観中

閉店間際に客がほとんどいない店内に入る亜紀。

レジ内で作業している葛西に近づく。

亜紀「……あの」

葛西「はい！」

亜紀、恐る恐る、求人用の張り紙を指差す。

葛西「あ……バイトですか？」

亜紀「あ、はい、あの……」

葛西「……？」

亜紀「……ふく……れきしよ、売ってますか？」

葛西「……」

葛西、張り紙の「履歴書」という字を見て、

葛西「……」

6

同・文具売り場

履歴書の売り場に案内される亜紀。

葛西「これです。『りれきしよ』。書いて持ってきてもらえれば。

店長、私なので。葛西です」

亜紀「……」

葛西「バイト、はじめてかな？」

亜紀「……これ」

葛西「うん？」

亜紀「……どうやって書けば」

葛西「……」

7	<p>同・事務所</p> <p>葛西、亜紀に履歴書を書かせている。</p> <p>葛西「17か、高校2年生？」</p> <p>亜紀「……」</p> <p>小学校卒業、の欄で筆が止まる亜紀。</p> <p>葛西「……？」</p> <p>卒業、という字は漢字が間違っている。</p> <p>葛西「……漢字、苦手？」</p> <p>亜紀「……あの、中学校、全然、行かなくて、それで……」</p> <p>葛西「……」</p> <p>亜紀「(立ち上がって)あの、すみませんでした！ 帰ります」</p> <p>葛西「(慌てて)待って！」</p> <p>振り返る亜紀。</p> <p>葛西「……いつから来れる？」</p> <p>亜紀「(え、と)」</p>
8	<p>矢野家(深夜)</p> <p>帰宅した亜紀。</p> <p>るみ子がこたつでそのまま寝てしまっている。</p> <p>亜紀「ママ……風邪ひく」</p> <p>るみ子を引っ張り出そうとする亜紀。</p> <p>るみ子の左手の薬指に、指輪が光っている。</p> <p>亜紀「……」</p> <p>亜紀、指輪を見つめる。</p> <p>亜紀「……」</p>
9	<p>スーパー・外観(バックヤード(数日後・朝))</p> <p>葛西に分厚いマニュアルを渡される亜紀。</p> <p>葛西「まあ実際やつてもらわないとピンと来ないとは思うんだけど、一応覚えてもらって」</p>

亜紀「……はい」

葛西「……もう少し、声、出るといいね。うちは、売り場出る前に、コレ、声に出して読んでから、入ることになってます」

「接客用語唱和」と書かれた紙が壁に貼ってある。

亜紀「接客、という字を見て」……」

亜紀、拳をぎゅつと握る。

葛西「あ、せっきやくようご、しようわ、ね」

亜紀「……すみません」

葛西「いや、みんな最初恥ずかしがる、よ、うん。少しずつ。ね」

亜紀「……」

スーパーの袋を下げて帰宅する亜紀。  
るみ子、目を血走らせて、

るみ子「遅いよ！」

亜紀「！……ごめん」

るみ子「どこ行ってたの！？ 指輪、指輪知らない！？」

亜紀「えー！？」

亜紀、洗面台に行き、置いてある指輪を見つける。

亜紀「(渡して)あるよ」

るみ子「……(フーツとため息をもらし)……どこ、行ってたの」

亜紀「……バイト、しようと思って」

るみ子「……バイト？」

亜紀「すぐごはん、作るから」

るみ子「バイトって？」

るみ子、指輪をはめようとする。

亜紀「……パパ、子供できたって」

るみ子「(手が止まり)……え？」

亜紀「……もう、生まれるって。……もう、お金入れてくれなく

なる……かもしれない、と思って」

るみ子「……あーっ……そう。そう」

亜紀「……ごはん作るよ」

るみ子「……(泣き始め)ごめんね……亜紀、ごめんね……ママ、マ

マがこんなだから……ごめんね、ごめんなさい」  
亜紀「……焼うどんでもいい？」  
るみ子「ママなんか、死んだほうがいい……」  
亜紀「大丈夫だよ、亜紀、ずっとここにいるよ」  
るみ子「ほんと？」  
亜紀「ほんと」  
るみ子「一人に、なりたくない……」  
亜紀「うん」  
るみ子の頭を撫でる亜紀。

11  
スーパー・点描

葛西、亜紀に注意している。  
葛西「声……もう少し頑張ろうか。接客だからさ」  
亜紀「はい、すみません」  
× × ×  
レジに入っている、亜紀。  
客に釣り銭を渡すと、  
客 1「……あの、足りなくないですか？」  
亜紀「……えっ」  
葛西が駆け寄り、  
葛西「申し訳ありません！ 失礼しました」  
亜紀「……」  
× × ×  
バックヤードで作業する亜紀。  
葛西がレシートを持ってやって来る。  
葛西「……矢野さん」  
亜紀「(ビクツとして)はい」  
葛西「20パーセント引きと20円引き、違うのわかる？」  
亜紀「……………(目が泳ぐ)」  
気まずい間。

12  
矢野家・外観(中(数日後・深夜))

小学生用の漢字ドリル、計算ドリル、辞書などをこたつの上に広げる亜紀。パラパラとめくる。小学生のときの書き込みを眺める。

亜紀「……」

スーパ―のマニュアルを広げる亜紀。

亜紀「……(ふうー)」

× × ×

翌朝。るみ子が起きてくる。

勉強しながら寝てしまった様子の亜紀。

るみ子「……」

漢字ドリルをパラパラとめくる、るみ子。

るみ子、亜紀の頭をそつと撫でる。

るみ子が立ち上がる、と、亜紀が起きる。

亜紀「……。え？ わつ、え！？ 何時！？ 何時！？」

るみ子「……」

亜紀「うわ！ わつ……やば、何時！？」

バタバタと支度をする亜紀。

亜紀「ちよつ……やばい、あー……もう、ママ、洗濯、帰ったら

するから！」

亜紀、玄関に腰掛け、スニーカーを履こうとする。

その後ろ姿を眺める、るみ子。

履き古したボロボロのスニーカーが目に入る。

るみ子「……」

× × ×

※フラッシュ。

同じように玄関に腰掛け、靴を履く亜紀の姿。

背中にはランドセル。

同じスニーカーだが、おろし立てでまだ綺麗だ。

× × ×

亜紀「行ってきます！」

慌ただしく出て行く亜紀。

るみ子「……」

るみ子、亜紀の部屋に入る。

小学生のまま、時が止まったような部屋。

埃をかぶったランドセルに触れる、るみ子。

× × ×

亜紀の声「ママ」

るみ子「!!」

居間の方に戻る。と……、

× × ×

※るみ子のイメージ。

ランドセルを背負った亜紀が、泣いているるみ子の背中を撫でている。

亜紀「大丈夫だよ、亜紀、おうちいるから」

るみ子、泣き止まない。

亜紀「大丈夫、亜紀はママひとりにしないよ」

× × ×

るみ子「……」

るみ子、ゆっくりと、指輪を抜く。

× × ×

化粧台の引き出しから、指輪のケースを取り出するみ子。石のついた婚約指輪と、結婚指輪を並べ、電話をかけるるみ子。

るみ子「あ、あの……もしもし、買取、お願いしたいんですけど」

13 スーパー・事務所(数日後・昼)

ラップで包んだおにぎりを食べて休憩している亜紀。

葛西「矢野さん」

亜紀「はい」

葛西「休憩中、ごめんね、佐藤さん、こちら矢野さん」

葛西のうしろに、佐藤夏菜子(さとう かなこ 18)が立っている。今時の可愛い見た目の女の子。

亜紀「……」

夏菜子「(元氣よく)佐藤です。よろしくお願ひします」

亜紀「……矢野です」

葛西「ふたり、同い年だけど、佐藤さんのほうがちょっと先輩だから。いろいろ教わって」

14

同・ロッカールーム

帰り支度をする亜紀と夏菜子。

亜紀に矢継ぎ早に質問する夏菜子。

夏菜子「え、矢野さんて地元この辺ですか？ え、タメなんですよね？ 中学どこですか？ 私2中なんですけど。知ってる人とかいませんか？」

亜紀「あ……私は、引越してきて」

夏菜子「えー、そうなんですかー。え、高校どこですか？ 受験する組ですか？ あ、連絡先、交換しません？(と、ポケットからスマホを出す)」

亜紀「……」

夏菜子「あ、IDこれなんで、検索してもらって」

亜紀「……あ……ごめんなさい……あの、携帯、持ってなくて」

夏菜子「……え。(絶句して)マジですか、あー……アレですか？ 縛られるの、イヤ的な？」

凝ったネイルが施されている夏菜子の指先を見つめる亜紀。

亜紀「……」

15

同・化粧品売り場(夕)

330円のマニキュアを見つめる亜紀。

手に取る、が……、

亜紀「……」

棚に戻し、立ち去る亜紀。

16

矢野家(夜)

浮かない表情の亜紀が帰ってくる。

亜紀「！……え？」

るみ子が台所に立って食事の支度をしている。

亜紀「……大丈夫？」

るみ子「大丈夫、つてなによ、昔はやってたでしょ」

亜紀「やってたって……3品くらいしかレパートリーなかったじやん……」

るみ子「いーから！ 座ってて！」

× × ×

るみ子、食卓にナポリタンを出す。

亜紀「……」

るみ子「……嬉しくない？」

と、インターホンが鳴る。

るみ子「あ、来たかも」

亜紀「？」

宅配業者から荷物を受け取っている、るみ子。

怪訝な顔になる亜紀。

るみ子「亜紀、あのね」

亜紀「……またなんか買ったの？」

るみ子「え」

亜紀「またなんかネットで買ったの！？」

るみ子「……あのね」

亜紀「いくらしたの！？」

るみ子「……」

亜紀「買い物、しないでって言ったよね！？」

るみ子「……あのね、亜紀、ママ、パパとちゃんと別れ」

亜紀「遮ってうちね！ お金ないの！ あのね、待っててもお父さん、帰ってこないから！ うちら捨てられたの！ わかる！？」

るみ子「……」

亜紀「……なんで？ なんでこういうことできるの？ なんで？」

るみ子「……」

亜紀「わたし、なんにも知らないんだよ……」

るみ子「……」

亜紀「わたし、漢字もふつうに読めないの！ ふつうのこと、何にもできないんだよ！」

るみ子「……」

亜紀「……なんにも知らなかった。うちは……普通じゃない」

亜紀、立ち上がり玄関を出る。  
るみ子「……」  
るみ子、亜紀を追おうとするが、玄関が立ちはだかる。  
るみ子「……………」

17 公衆電話→夜道

電話をかける亜紀。  
亜紀「……パパ、パパ……」  
つながらない。落胆して、受話器を置く。

18 夜道→スーパー・外観

夜道をあてもなく歩く、亜紀。  
バイト先に足が向いてしまう。  
営業終了時間で、中は暗い。

亜紀「……」  
亜紀、帰ろうとすると、  
葛西の声「矢野さん？」  
振り返る亜紀。  
葛西「どうした？ 忘れ物？ 開けようか？」  
亜紀「……………」

19 夜道

自販機でコーンポタージュを買ってやる葛西。  
並んで歩く二人。  
葛西「はい」  
亜紀「……(受け取る)」  
葛西「明日早番なんだから、さっさと帰りなさいよ」  
亜紀「……………」  
葛西「……まあ、俺全然帰ってなかったけどね！」  
亜紀「え？(顔をあげる)」  
葛西「高校の時なんか、もー全然、帰らないで、遊んでたね。学

校も、行ってないようなもんだったし」

亜紀「……ちよっと、想像つかない、です」

葛西「矢野さん、履歴書、って読めなかったでしょ」

亜紀「！……すみません」

葛西「俺もね、読めなかったの」

亜紀「(え、と)」

葛西「初めてバイト、するときね。あ、うちの店ね。そんときの

店長に、ふくれきしよ、どこですかって聞いて」

亜紀「……」

葛西「まあー……馬鹿にされたよね。そんときの店長がね、こ

いつウチで面倒みないとヤバいなって思ったとか言ってる。

あ、パートさんとかに、内緒ね。威厳がなくなるから」

亜紀「……」

葛西「まー……、せっきやく、はさすがに、読めたけどね(と、笑

う)」

亜紀「……わたし」

葛西「うん？」

亜紀「……あの、もっと、シフト入ります」

葛西「……？」

亜紀「あの、もっと、入って、シフト。働きます。いろいろ、勉

強しますもっと、覚えます」

葛西「……」

葛西に言っているようで、自分に言っている亜紀。

亜紀「もっと、いろいろ知ります、ちゃんと。ちゃんと見ます。

いろんなもの。自分の為に。それで、お金。お金も、貯め

ます。お金貯めて……それで」

葛西「うん」

亜紀「……」

葛西「……10年後、店長になります？」

亜紀「!?!? ……無理、無理です！ 無理！」

るみ子、待っていたのか、こたつでそのまま寝ている。

亜紀「……」

亜紀、るみ子の手を両手で包む。

亜紀「……もう、知らないよ……知らないから」

るみ子の手に触れていると、

亜紀「……？」

るみ子の手には、指輪がない。

亜紀「……え。え？」

亜紀、慌ててこたつの中や色んな場所を探す。

亜紀「……(届いた荷物に目をやり)……」

亜紀、化粧台の引き出しを開ける。

婚約指輪のケースも、ない。

亜紀「……」

亜紀、荷物の包みを開ける。

亜紀「……！」

新品の、可愛いスニーカー。

亜紀「(泣き声交じりに)……なに、それ……もっと、働けてこ

と……？」

そう言いながら、スニーカーを抱きしめる亜紀。

2  
1

矢野家(翌朝)

るみ子、目を覚ます。

亜紀の姿はない。

が、昨夜のナポリタンの皿が、空になっている。

るみ子「……」

立ち上がり、玄関に向かう。

古い方の靴が残っている。

るみ子「……」

るみ子、目の前に立ちはだかる玄関を見つめ、

るみ子「……」

2  
2

スーパー・レジ(昼)

新しいスニーカーで働く亜紀。

亜紀「ありがとうございます！ いらっしやいませお待たせしました！」

テンションの違いに、呆気にとられている夏菜子。

葛西「(小声で)矢野さん、あの、すごくいいんだけど、ちょっと元気すぎかも」

亜紀「あつ、はい！ すいません！」

23 矢野家

るみ子、鏡の前で身支度を整えている。

るみ子「……」

亜紀の履いていたスニーカーを履く、るみ子。

意を決し、玄関を開けた。

24 スーパー・レジ

亜紀、危なっかしいが、元気よく会計をこなす。

葛西、笑顔でそれを見守っている。

亜紀「ありがとうございます！ またお越しくださいます！ お待たせしま……」

亜紀、客として来たるみ子と目があって……、

亜紀「……」

亜紀、こみ上げるものをぐっところえ、

亜紀「いらっしやいませ！」

〈了〉